

総合周産期母子医療センター

1. スタッフ



センター長 (教授)
なかもら きみとし
中村 公俊
副センター長
おおば たかし
(准教授) 大場 隆
みつづち ひろし
(特任教授) 三淵 浩
もとほら たけし
(講師) 本原 剛志
講師 いわい まさのり
岩井 正憲
診療講師 齋藤 文誉
特任助教 田仲 健一
助教 1名

2. センターの特徴、診療内容

周産母子センターは、新生児集中治療室 (NICU) と母体・胎児集中治療室 (MFICU) を備えており、母体・胎児管理と新生児管理との融合による「周産期」医療を目指して、各診療科の密接な連携を行い、母子ともに健やかに過ごせる未来のために努力している。「周産期医療」「新生児医療」「生殖医療」の3つの専門領域を設置し、それぞれに副センター長が配置されており、西8階病棟の新生児部門にNICU12床、GCU12床、西7階病棟には母体・胎児集中治療室 (MFICU) 6床が開設され、西8階・東8階の小児科、小児外科と共に小児周産期集学的治療フロアを形成している。当院は県内2施設目の総合周産期母子医療センターであり、もう一つの指定施設である熊本市民病院、および地域周産期母子医療センターである熊本赤十字病院、福田病院と連携を密にとりながら、熊本県全体の周産期医療の円滑な診療に貢献できるよう努めている。

3. 診療体制

日本小児科学会専門医9名、日本産科婦人科学会専門医5名、日本人類遺伝学会臨床遺伝専門医4名
日本周産期新生児学会専門医3名、日本超音波医学会専門医2名

○外来診療体制

小児科外来として月・水・金にNICU退院後のフォローアップ外来を行っている。産科外来は月・水・木(再診のみ)・金で、更に助産師外来、母乳外来で、妊産婦へのきめ細かい医療を提供している。

火曜日に遺伝カウンセリング外来(予約制)を開設しているほか、平成25年12月より無侵襲的出生前遺伝学的検査 (NIPT) への対応を開始した。

NICU/GCUには平成30年より保育士も診療に加わった。現在3名の保育士が新生児のケアを看護師と協力して行うことで、きめ細やかな家族に寄り添った医療を提供できるよう努めている。

○病棟診療体制

月：小児科中村公俊教授回診
産科婦人科近藤英治教授回診
小児外科日比泰造教授回診
水：周産期カンファレンス
木：新生児学寄附講座松本志郎特任教授回診

4. 診療実績 (令和5年度)

○疾患別の患者数

*新生児：総入院数209名、
超低出生体重児11名 極低出生体重児38名
低出生体重児98名 小児外科症例16名、
低体温療法9例、一酸化窒素吸入療法3例
気管内挿管による人工呼吸管理146例
新生児救急車出動回数12件
*母体：総入院数567名、分娩数323名
早産57名 妊娠高血圧症候群53名
前置胎盤28名 常位胎盤早期剥離4名
胎児発育不全20名 多胎妊娠12名
母体救急搬送100例

○主要な疾患の治療実績

母体：帝王切開率53.6%

○外科症例

先天性食道閉鎖、小腸閉鎖、横隔膜ヘルニア、鎖肛、腸回転異常等、出生後早期に手術が必要となる疾患について小児外科と共に診療している。

○緊急帝王切開症例、低体温療法症例

NICUでは重症新生児仮死で神経予後改善のため低体温療法を要する児、MFICUでは出生後に仮死になるリスクのある常位胎盤早期剥離など緊急性の高い母体症例を積極的に受け入れている。

5. 地域医療への貢献

熊本新生児合同カンファレンス、熊本周産期懇話会の開催。県の防災ヘリを利用した母体、新生児搬送受け入れを行っている。また新生児救急車の運用を継続し、昨年は7件行った。新型コロナウイルス感染症の母体および児(疑い含む)の入院受け入れも対応しており、昨年度は母体93名、新生児3名の入院診療を行った。

6. 医療人教育の取組

学生教育としてポリクリ、クリクラでの実習、卒後教育として初期研修、後期研修のプログラムの一環として研修医の受け入れと指導を行っている。日本周産期・新生児医学会の周産期専門医基幹施設、新生児専門医指定施設として専門医を養成、新生児蘇生講習会Aコースを年2回、Sコースを年4回行っている。

NICU



GCU



家族室・授乳室



小児科病棟へとつながる廊下



MFICU

新生児救急車

